

近藤康男編

明治大正農政經濟名著集
20

世界農業史論
佐藤昌介・稻田昌植

社団法人 農山漁村文化協會

総編集

近藤 康男
(東京大学名誉教授)

編集委員

阪本 楠彦 (東京大学)
村上 保男 (埼玉大学)
梶井 功 (東京農工大学)

明治大正農政経済名著集②

世界農業史論

昭和51年12月10日 第1刷発行

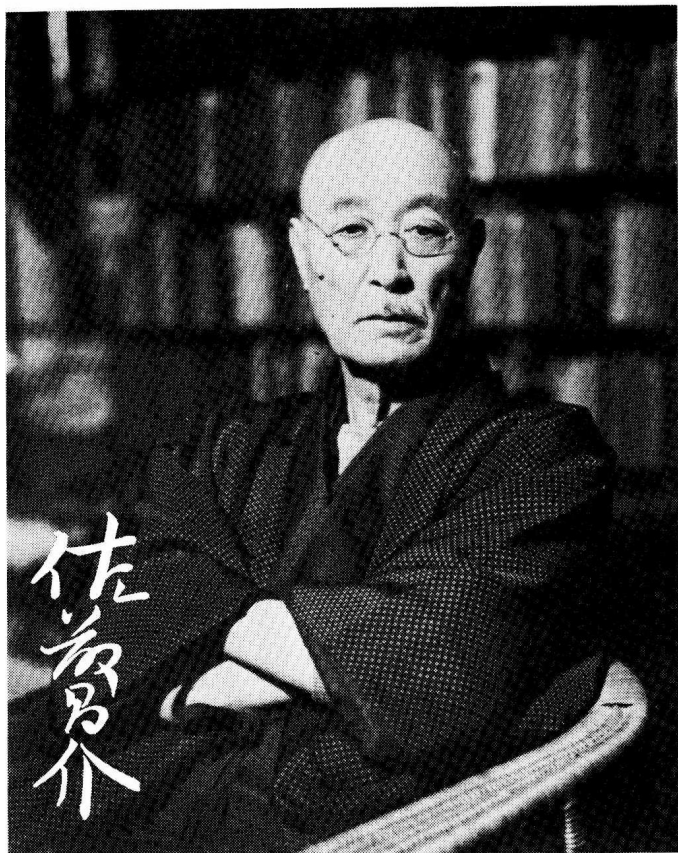
著者 佐藤 昌介
稲田 昌植

発行所 社団法人 農山漁村文化協会
郵便番号 107 東京都港区赤坂7丁目6-1
電話 東京(585)1141代 振替 東京2-144478

3333-501270-6805
〈検印廃止〉
定価は外箱に表示

印刷／新協印刷
製本／古賀製本
装幀／高橋錦吉

佐藤昌介 昭和十年ころ自宅書齋にて



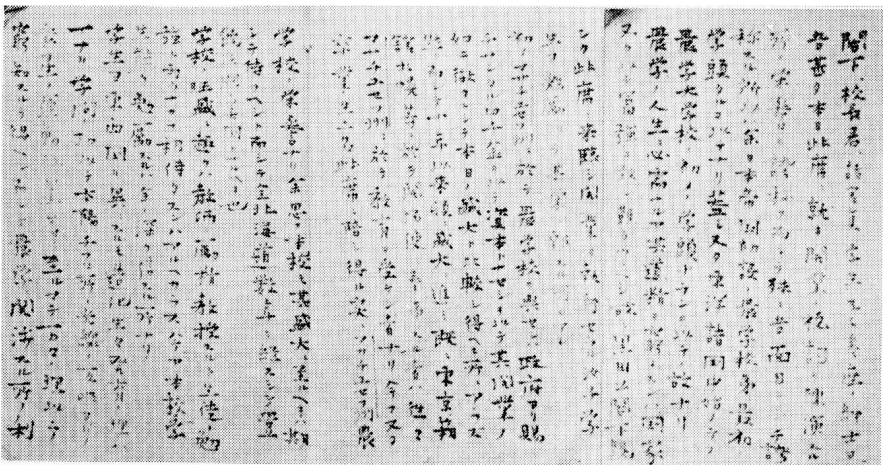
札幌農学校第1期卒業生(明治13年) 前列左から荒川重秀・黒岩四方之進・佐藤昌介・渡瀬寅次郎・内田澹・伊藤一隆・出田晴太郎・後列左から佐藤勇・大島正健・中島信之・柳本通義・田内捨六・小野兼基

農業経済学専攻の学生たち
(明治31年)

左端：佐藤昌介校長
右端：高岡熊雄助教



稲田昌植 昭和三十六年



写真提供 北海道大学図書館

佐藤 昌彦
稲田 昌樹

札幌農学校開校式におけるクラーク教頭演説 第1期生佐藤昌介が当日記録したもの

一、『世界農業史論』出版の経緯と意義

『世界農業史論』は、我が国農業経済学の草分けであり、当時北海道帝国大学の総長であった佐藤昌介博士が東北帝国大学農科大学学長るとき、農学第二講座（農業経営学及び農史）を担当していた際の講義を基とし、それに大正六年十一月、米国研究会新聞部発行『米国研究』に掲載された「アメリカ農業史」を加え、二男で稻田家を継ぎ、東北帝国大学農学部及び東京帝国大学法学部を卒業し、当時貴族院議員、農林大臣有馬頼寧に用いられて、我が国の拓殖の農政に重きをなしていた昌植が、後輩で同じく北海道帝国大学農学部及び東京帝国大学法学部を卒業し、当時東京外国語学校教授として農政学者であった半沢耕貫（現 千葉商科大学講師）の助力を得、同じく後輩北海道帝国大学農業経済学出身の若手新進農林官僚であった伊田、荒木、菜袋等に、平易に書き改めさせ加筆編纂したものである。

佐藤教授の講義された農業史は、学生有志の手によって小冊子として刊行頒布されていた。私の知る限りでは、第一章 農業前段の職業及び其進化、第二章 古代国民の農業、第三章 ドイツ国民の農業及び其進化、第四章 第一九世紀に於けるドイツの農業 の四章よりなる序説（明治四十三年四月印刷）と、第一章 総論、第二章 上古の農史、第三章 中古の農史、第四章 近古の農史、第五章 明治当代の農業 に分けて述べた「日本農業史」に、第一章総論、第二章 支那山河の形勢、第三章 有史前の支那、第四章 帝堯の事績、第五章 帝舜及び帝禹の事績、第六章 夏・殷・周三代の興亡、第七章 井田の解、第八章 周以後の支那、第九章 荒政策、第十章 開墾樹芸水利及び銅

育の一〇章に分けて論じた「支那農業史」とを合わせた一冊(大正二年正月刊)、古代国農史・ドイツ農史として最初の序説を繰り返したほかに、第一章 総論、第二章 上古農史、第三章 中古農史、第四章 近世農史、五、六、七章で近世農史後期を三章に分けて論じた「イギリス農史」を加えて一冊となった、少なくとも三冊が刊行されている。『世界農業史論』の緒論、第一編 日本農業史、第二編 支那農業史、第三編 ドイツ農業史、第四編 イギリス農業史は、前書の漢文調を平易な口語に改めたものである。第五編 フランス農業史については、先のような刊本があることは知らない。しかしこれは比較的新しい講義で、恐らくノートとして書き残されたものに拠ったものであらう。第一章 総論、第二章 史的フランス、第三章 フランス農業の進化一斑、第四章 大革命の農業に及ぼした影響、第五章 大革命以後の農業、第六章 フランス各農区農業の一斑 の六章に分けられ、比較的我が国に紹介されることの少ないフランス農業について大観している。第六編 アメリカ農業史は既述のとおり『米国研究』に寄稿したもので、第一章 総論(地理・気候・土壤・農区)、第二章 植民時代の田制と農業、第三章 国領地の管理及び其田制と農業関係、第四章 輓近^{ばんきん}に於けるアメリカ農業の進歩 の四章からなっている。国領地とは国有地、田制とは農地制度のことである。

世界農業史と名づけているものは、イギリス、アメリカ、フランス、ドイツの四カ国、並に日本と中国の六カ国につきそれぞれ個別に記述したもので、その記述の重点、精粗もおのおの異なっている。すなわち、ドイツは農業政策に重点をおき、イギリスでは農村社会及び経済に、フランスでは各地方における農業の状態に、アメリカでは土地制度に重点をおいている。日本及び支那農史では、農史というよりは比較的農業に焦点をあてた一般史であり、殊に古代中世に重きをおいて、近代については殆どふれていない。

農業はそれがおかれた自然環境に左右されることが多く、各その地方で特色があり、その発達変遷も異なることが

一般で、まず各国、各地方史を詳細にしたうえで比較し、農業の普遍的な本質を示す世界農業史がつくられるのが本筋であろうが、著者の試みはその第一歩といつてもいいであらう。

私の知る範囲では、抽象的な仮説を出発点として世界の農業史の共通の傾向を論じたものはあるが、まだ真の世界の農業を具体的に対象とした世界農業史のあることを知らない。恐らくこれは多くの専門家の一致した国際協力がなくては不可能であり、その際もおその中心指導者を見つけることが困難であらう。しかし農業事情調査に対する国際機関ができ、農業問題が世界的問題となつているとき、必ずしも不可能ということはできないが、これは将来の問題である。

本書が出版される一〇年前、即ち一九二五（大正十四）年にアメリカのミネソタ大学（University of Minnesota）の経済史の教授で、すでに一九二二年、『経済史入門』（In Introduction to Economic History）で該博な知識を示していたノーマン スコット、ブライエン グラース（Norman Scott, Brien Gras）が『世界農業史』（A History of Agriculture）を著わして学界の注目をあつめ、同書は昭和九（一九三四）年、札幌農学校で新渡戸稲造教授の薫陶を受け、郷里愛媛にこもつて後進を育成するかたわら『愛媛県農業史』をまとめた菅菊太郎の手によつて翻訳され、東京明文堂から刊行された。『世界農業史論』刊行の一年前であつた。ただし、『世界農業史』と名づけ、広くフランス、イタリアそれに中国、日本の文献・事実に目をそそがれてはいるが、小見出しに in Europe and America（欧米における）と注記してあつて、その世界は依然として旧い欧米中心の世界に限られている。『世界農業史論』は、時を同じうして研究が進められながら、当時の水準からいえば不完全の批判を免れなかつたとはいへ、日本及び中国＝東洋の史実をも加えた点において論と名づけて謙遜しているが、世界を欧米以外に広げた点で先駆的なものだったといえよう。

しかも、農業史論の目ざしたところは、その巻頭言でも明らかとなり「農村問題の社会的経済的並びに政治的解決に際しては過去の実状を正確に検討する事が極めて重要」であり、それには「欧米先進国が体験し来たったものも参考とす可き資料に乏しからぬ事と思はれ」「これ我国及世界の重なる国々の農業史を論じた本書を著せる動機である」として、目的が学問としての世界農業史等の確立にあるのではなく、我が国の農業問題の解決に資するためであり、換言すれば鑑としての農業史であったのである。それには博覧強記とともに、農業に対する深い理解と、問題の本質、従ってその理想の確固たる把握とが必要であったのである。農業経済学を講ずるとともに講じた佐藤教授の農業史の目的は実にそこにあったのである。広く各国の農業史を歴史の形で語りながら、これを世界農業史と銘打たず『世界農業史論』としたのはこの点にあったものと思われる。そしてこうした意味では著者は最適任者だったのである。

二、札幌農学校の学風

著者佐藤昌介博士は、周知のとおり札幌農学校第一期卒業生であり、同教授で校長を兼ねた最初の邦人であり、これを北海道帝国大学にまで育て上げた育ての親でもある。

札幌農学校は農学校と称し、予科三年及び本科四年を設け、専門課程と称しながら、今日の農学部のように農学を専門に教えるものではなかった。今、開校当時の学課表を見ると、自然科学に関する基礎学科並に農学及びこれに関係の深い諸学科のほか、その基礎として第一年級から第三年級まで英語に力をそそいだが、英書を通じて教養を高める

ことに努め、第三年級の第三学期には英文学史があった。そのうえ、第一、第二年級には演説法があり、第三年級では英作文、第四年級となると心理学及び論理学・経済学及び英語演説があった。しかも入学試験には英語・算術・外国語・地理・萬国史などがあつたのである。単なる農学者を養成する専門学校ではなく、農業を基盤として展開する開拓、新しい文明社会の指導者養成を目標としたのであつた。

當時のアメリカの農業教育も農業を基盤とする社会の形成、広義の農業教育を目ざしていたのであつた。そして明治十二年には心理学・論理学を削つて歴史哲学とし、十三年の第四年報によれば、第一学期中、英文学並に英語学に「一八世紀における歴史上著明なる事跡の口授を始め、当期に於ては毎週一時間を此科に充て、目的は記憶力を喚醒して英国並英文学上に関する風俗・慣習及事跡の影響を解説し、併せて博物学上用ひざる他語の使用を練習す」とし、歴史に相当の力を入れているが、十四年からは予科、第二年前期より第三年級後期まで毎週三時間の地理を課するとともに、第三年後期より萬国史毎週六時間、第四年前期に歴史毎週六時間を課した。

本科の歴史哲学は後に欧州史にかわり、明治二十四年には農業史となつたのである。

明治二十二年『札幌農学校一覽』によれば、予科において第一年日本歴史毎週一時間、第二年東洋歴史及び萬国史毎週二時間、第三年萬国歴史毎週二時間、それに第四年さらに日本文明史及近世史が毎週二時間課せられた。翌年には、第一年級日本史毎週一時間、支那史毎週一時間、第二年及び三年萬国史毎週二時間ずつ、第四年古代史毎週二時間、五年目近世史毎週二時間となつた。本科すなわち農学科になると、二十二年からは第二年に毎週歴史二時間があり、二十四年からは、第三年後期に農業史一班が毎週一時間、第四年級後期に殖民史毎週二時間が設けられた。そして明治四十年東北帝国大学農科大学となつてからは、農学科第三年二、三学期に二時間ずつ農史が講ぜられることとなつた。

これらの授業を誰が担当したかは今明らかではない。ただ最初の英文学史はドクトル オブ メヂシン (ハーヴァード大学) バチェラー オブ サイエンス (アマスト大学) ジョン シー カッター (John C. Cutter M. D.) び、この人が歴史哲学として欧州史を講じた。予科では、明治十三年英語の教官として招かれたゼームス サンマース (James Sammers) が萬国史を口述した。

明治二十四年農業史が課目に加えられ、ちょうどその年、アメリカ留学からドイツに転じ、アメリカのジョンズホプキンス大学より名誉バチェラー オブ アーツ、ドイツのハレ大学よりドクトル フィロソフィーの学位を受けて帰朝し、母校の教授に任ぜられた第二期卒業生新渡戸稲造博士が担当した。博士はアメリカに於て三年間経済学・史学・文学を学び、ドイツではベルリン大学で農政学及び統計学とともに農業史を研究し、ジョンズホプキンス大学では “The Intercourse between the United States and Japan; an Historical Sketch (日米交通史)”、ハル大学では “Über den Japanischen Grundbesitz dessen verteilung und landwirtschaftliche Verwertung — Ein historische und statistische Studie—1890” をまとめて、ともに公刊した。いずれも歴史的な研究であった。

新渡戸教授の農業史の講義は、その一部が明治三十一年、大日本実業学会 (実業之日本社の前身) の講義録として公にされたものによってうかがうことができる。もっとも教授は札幌農学校教授の職にあること僅かに六年、明治三十年病をもって札幌を去り、鎌倉に療養生活を送り、翌年アメリカに転地、永久に母校を去ってしまった。「農業発達史」は鎌倉療養中看護に当たっていた三十年札幌農学校卒業生小谷武治に口述筆記させたものである。内容は、農業開発以前生産の状態、農業の起源、古代エジプト農業、古代ギリシャの農業、古代のローマの農業及びフランス農業沿革の大略の六章よりなり、ことに農業の起源を論ずる前部は博士の博識を遺憾なく發揮したもので、それにつづく古代国家の農業史とともに我が国における農業史の先駆として誇りうるものである。病床にあり、研究はもとより執

筆すら禁じられていたので、博士の研究の結果の一部にすぎず、殊に近代はフランスの農史にとどまり、不完全なるものに終わり、その後、資料の収集やメモ記入をつづけられたようであるが、ついに整理も集大成することができなかったことは、惜しんでも余りある。

佐藤博士は新渡戸教授が去った後の農史を担当したのである。

三、著者の経歴と横顔

佐藤昌介は明治十三年七月札幌農学校を卒業し農学士の称号を得たが、当時、札幌農学校卒業生は卒業後五カ年開拓使に奉職する義務があったので、開拓使御用掛として母校に残り、農学の教官で札幌農学校園の主任であったブルックス W. P. Brooks をたすけて本科一年級の農業実習を担当した。しかし、十五年一月、農学校を経営していた開拓使が廃止になり、札幌農学校は農商務省の管轄となって規模は著しく縮小された。昌介もそれに伴って農商務省御用係となったが、このままでは自己を伸ばすことができないことを悟り、職を辞して自費でアメリカへ渡った。そして明治六年、開拓使に職を奉じて以来札幌にあること十余年欧米農業の实地指導に当たり、北海道畜産の基礎を築いたエドウィン・ダン Edwin Dun の尽力により、ニューヨークを距たる五〇マイルの地にあるホートン農場に住み込み、アメリカ農業の実験を体験した。ホートン農場は当時アメリカ屈指の大農場で、その最も進んだ農業経営技術を身につけたのである。しかし目的は進んだ学問であつた。たまたま当時アメリカの新進大学であつたボルチモア市のジョンズ・ホプキンス大学で大学院研究生を募集していることを知り、「自由貿易論」と題する論文を書いてこれに

応じたが不幸にして採用されなかった。しかし審査主任のアダムス (Henry Carter Adams) 博士は、昌介に書を送り、来学して学ぶことをすすめた。今日では同大学は医学部で有名だが、当時は人文科学方面に熱心で、アダムス博士は歴史を専攻しており、その同僚のイリー (Richard Theodore Ely) 博士は経済学者であつた。昌介は、ニューヨーク在勤の総領事の斡旋で農商務省御用掛になり、アメリカ滞在を命ぜられ、大学からは礼遇研究者の待遇を受け、学資に心配なく学ぶことができた。その時の農商務省からの命令によれば、帰朝後は札幌農学校教授となる見込みで、満二カ年間農学及び北海道開拓殖民上参考となることはすべて学んでこいというのであつた。アダムスもイリーとともにドイツの大学に学んで帰国した新進気鋭の学者だつた。そしてそのドイツはロッシャー (Wilhelm Roscher) に始まりヒルデブランド (Bruno Hildebrand) クニス (Karl Knies) によつて展開された歴史学派が全盛を極め、シュモラー (Gustav von Schmoller) が抬頭しつつあつた。殊に後、明治二十四年五月、昌介が『威氏経済学』と題して翻訳出版し、昌介の我が国における最初の出版となつた *An Introduction to Political Economy* (1889) の著者イリーは、ドイツ留学中クニスにつきドクトルフィロソフィーの学位を得、アメリカ経済学の先達者の一人となつたが、理論より叙述に長じ、新しい問題を捕えこれを理論的に構成する才能をもつてゐた。後、土地経済学の先駆をなした。佐藤博士はこの人の影響を受けたのである。博士はその後ドイツに留学し一八八六 (明治十九) 年、母校ジョンズ・ホプキンス大学歴史学政治学研究叢書の一として『アメリカにおける土地問題の歴史』(*History of the Land Question in the United States*) と題する一八一頁からなる著書をまとめ、同大学からドクトルオブフィロソフィーの学位を得たが、博士が農業の実際、殊に我が国における農業経済学の先駆者として恐らく日本で最初と思われる『農業経済学』なる著書を著わし、明治三十三年以後は、北海道農会長として北海道農業の最高指導者たる位置を占め、次から次へと出てくる農業問題解決の指針となるエッセイを多く書きながら

非常に歴史に興味をもち、農学校で歴史を原書によって講義するほか、大正三年、日米交換教授としてアメリカの一流の大学で講演した講演の集録は *Some Historical Phases of Modern Japan* であり、大正二年刊行された大隈重信編『開国大勢史』にも「北海道誌」を寄稿、北海道開拓史を手短に、しかも要を得て紹介している。博士は、幼少の時習った漢学の素養もあったろうか、歴史に対して深い興味と関心をもっていたのであり、非常な名文家で、語られる話そのものが筋の通った論文となっていた。新渡戸博士の同郷の先輩であり、新渡戸博士の洋行中面倒をみ、農学校の教授とし、ドイツに留学させたのも佐藤博士であった。兩人で札幌農学校の農業の社会科学的部門を担当していたが、新渡戸博士の退官によって、その受持、殊に農史を担当することになったのである。

四、著書の内容と学問上の位置

佐藤教授の講義を見ると、諸論はシェムベルヒの経済生活発達段階説、第一猟漁時代、第二放牧時代、第三農業時代、第四手工業及び商業時代、第五製作工業時代、またヒルデブラントの自然経済時代即ち現物経済時代、貨幣経済時代、信用経済時代等を紹介し、農業は文明の要素、人智開発の本源であり、歴史は農業時代に入って初めて起こったことを述べ、しかし古代国家ギリシャ・ローマではこれを奴隷に任せて省みなかったために、農業も衰え、国も亦衰亡したと語っている。

第一編 日本農業史は、上古・中古・近古・明治の四時代に分けてその変遷を語っているが、上古とは大化改新まで、中古とは保元・平治の乱、近古は二期に分け、第一期は元和すなわち徳川幕府の基礎が固まった時期まで、第二期は

明治維新までとしてその變遷を語っている。明治時代は、明治維新後の農政の変化を手短に語っているにすぎない。

第二編 支那農業史は、先ず山河の形勢を概説し、有史前から始めているが、重点は、当時の中国史書に従ひ堯・舜・禹・夏・殷・周等の古代におき、それ以後は他日にこれを譲ることにして、ただ政權の變遷を物語っているにすぎない。

第三編 ドイツ農史は、すでにゴルツのドイツ農業史の研究が著わされた後のこととて詳しく、第一八世紀以前、ウイリアム一世、フリードリッヒ大王の農政が戦争と分裂によつて荒廃したドイツ農業に活路を与え、一九世紀農地改革によつて進歩した技術が採り入れられ、農事教育・組合・金融・保險制度等の導入によつて著しい進歩をなした経過をたどる。

第四編 イギリス農業史では、上古・中古・近世の三時代に分け、上古とはアングロサクソンの渡来からダニッシュ王の征服に至るまで、中古とは、一〇一七年ノルマンがアングロサクソンを征服し、その地にノルマン貴族を封じてから封建制度を崩壊に導く土地囲込制度の開始までの所謂封建制度時代、近世農史は前後二期に分け、前期はフランス革命までのイギリス農業の繁栄期、後期はそれ以後外国農産物との競争により受難期に入った状況を詳しくしている。

第五編 フランス農業史は、フランス革命前後に分けて、それ以前の農業と以後の農業の変化について述べているが、むしろフランス各農区の農業の概況の説明に重点をおいている。

第六編 アメリカ農業史は、緒論においてアメリカの農業の基礎となる環境について説明し、それより著者の最も得意とするアメリカの土地制度史を語り、その上に立ったアメリカ農業の著しい進歩の跡を語っている。

前にも述べたように、世界農業史と銘打つには、とりあげられた国が限られているばかりか、各国の記述が統一さ

れているとはいえず、書かれている内容も、世界農業に大きな影響を与え、世界農業として論すべき共通のものを多くもたらした第一次世界大戦以前に筆がとどめられ、刊行された当時において内容はすでに古典に属していた。しかし著者が農業史の講義を始めた一八世紀末は、従来技術学として取り扱われていた農業がようやく経済活動の一部と考えられ、農業経済学が誕生しつつあったときであった。従って従来政治史の一部として取り扱われていた農業が経済史の一部として扱われ始め、だからこそ、経済が国境をこえて技術・制度を拡大する意味において世界農業史なる概念が出始めたのである。当時としては、ドイツにゴルトツの『ドイツ農業史』*Geschichte der deutschen Landwirtschaft* が一九〇二、三年に生まれ、イギリスにはカートラー (Curler) の『イギリス農業小史』*(Short history of English Agriculture)* が一九〇九年に、フランス農業史としては『世界農業史論』の序文によればプロセロ (Q. F. Prothero) の研究等があった。アメリカ農業史が形をなしたのはカーバー (T. N. Carver) が一九〇九年 *Bailey's Cyclopedica of American Agriculture* に投じたものが首尾一貫したものといえよう。我が国においては、明治二十三年、四年、歴史書から農業関係の記事を抜いて編纂し農商務省から刊行された『大日本農史』はあったが、農史としてはようやく昭和の初め、日本経済史学会・社会経済史学会の発足によって体系的なものが生まれようとしていた。支那農業史に至っては、中国史の食貨志に記されたものにつき論ずるのが精々で、農業史らしいものが生まれたのは、一九二二年 M・ビーリーの『農業を中心にした中国経済史』*(Economic History of China with Special Reference to Agriculture)* が出たのみであった。とすれば『世界農業史論』は注目するに足る先駆的業績といえよう。

新渡戸博士の農業史は農業発達史と伺いうるように文化史的農業史であった。そして農業の起源及び古代の発達に重きをおき、近代の部門はただフランスで代表されていた。佐藤博士はむしろ、農業の政治経済制度の発達に重点を

おき、イギリス、アメリカ、ドイツ、フランスなど欧米先進国の農業史を探索するとともに、さらに日中のそれにも及び、それをさらに拡大したのである。新渡戸博士といひ佐藤博士といひ、我が国における農業史の先駆者だったのである。那須皓博士は、新渡戸博士『農業発達史』の解説において「本邦に於て西洋の農史の研究に先鞭をつけたのは著者以外には佐藤昌介博士であり、いずれも歴史浅き新開地北海道にて勉学に努めし人々であることは興味深い。環境と人物と学問との関係が、この間に仄見える感がある」と言っている。

事実二人の門下には、農業史研究の伝統が尾をひいた。後継者高岡熊雄教授は、明治二十五年、同好の士、殊に後、グラーズの『世界農業史』を翻訳した菅菊太郎等とともに新渡戸教授を会頭として札幌史学会をおこし、研究会を開いて結果を発表し合ひ、明治二十九年、北海道開拓史の先駆ともいふべき『札幌沿革史』を刊行し、自らは後すぐれた『ドイツ農業史』を書いたボン大学教授フォンデアゴルトツ(Theodor Freiherr von der Goltz)の『農政学』(Vorlesungen über Agrarwesen u. Agrarpolitik)を翻訳し、ドイツに留学してこの講義に参じ、ベルリン大学でシュモラー教授の下に、新渡戸博士がÜber den Japanischen Grundbesitzの最後の章で論じようとし、病氣のためやむなく割愛された『日本内国植民論』(Die innere Kolonisation Japans)をまとめ、同教授の推薦によりその編纂にかかるStaats und Sozialwissenschaftlichen Forochungen(国家学社会科学研究叢書)の第二十三編第三巻として出版された。北海道の拓殖史を学問的に取り扱った最初の労作で、同叢書は皆学位をもった人の研究論文であつた。高岡教授は帰朝後、ドイツ人カメラの農業経済学・農政学の出発点となつたカメラルウィッセンシャフト(Kameralwissenschaft—官房学—)よりとり、札幌農学校農業経済学専攻者のつくつていたカメラ学会からカメラ叢書を刊行、「二宮尊徳の研究」「旧加賀藩に於ける均田制度」「佐藤信淵の農政学説」「上杉鷹山公の農政」など我が国の経済史・農業史の研究の先駆となつた労作を発表した。そしてその後の農史の講義は、アメリカ